

フッサール現象学における感覚論の一考察

——身体とヒュレーの現象学に向けて——

稲垣 諭

序

フッサール現象学において「感覚(Empfindung)」概念は如何なる事象的布置を形成しているのか。このことを明らかにすることが本稿の主題である。伝統的に感覚概念が意味しているのは、様々な「感官(Sinne)」に与えられる「感覚与件(Empfindungsdaten)」であろう。フッサール自身、この概念を多くの箇所を用いており、それとほぼ同義の概念として「ヒュレー(Hyle)」という同様に伝統的な、それ故多くの問題を孕んだ概念をも、彼の現象学的探究の中で使用し続けた。これら感覚に纏わる概念が、ことに時間論の展開において「印象(impression)」概念とも密接に関連することで、フッサール現象学における感覚論に経験論の流れを汲む「感覚主義(Sensualismus)」との烙印が押されることとなる¹。しかしフッサールその人は、感覚主義の汚名を着せられることを執拗に拒もうとしていたのではないか²。確かにフッサールには哲学の伝統的概念を安易に踏襲するところがあり、そのことが事象をより紛糾させているという点があることは否めない。しかしその反面、彼は、既成概念の意味内実そのものを探究の深化と共に新たに形成し、しかも自らが気づいている以上に形成してしまう人ではなかったか。概念のみを捉えて批判することは安易であり、意味のないことである。それ故、我々が見定めねばならないのは、フッサールがそれら感覚概念により捉えようとした本来的な事象とは何かであり、同時に今後の現象学における感覚論の可能性なのである。

1 感覚の主題化

1-1 射映と統握図式の限界

既に『論研Ⅱ』でフッサールは、現象学的に捉えられた事象として、「感覚(体験)」と「知覚」を厳密に区別し、両概念が関係する内容の存在の差異をも指摘している。「意識されてはいるが、それ自身は知覚客観になることのない感覚という意味での内容の存在と、まさに知覚客観という意味での内容の存在との相違は」(XIX/1 395)、「普遍的な本質事況」(XIX/1 396)である。ここで理解されている両概念の配置は、

¹ vgl. K. Held : *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, 1966, S.98f.. また、「受動的綜合」の問題に精通していたラントグレーベでさえ、フッサールのヒュレー概念は「感覚主義の伝統の残滓から未だ解放されてはいない」と記している。L.Landgrebe : “Prinzipien der Lehre vom Empfinden”, in : *Zeitschrift für Philosophische Forschung*, Bd.8,1954, S.196.

² vgl. I 13,19, III/1 196f., VI 127, V 156, XVII 295, XXVIII 226.

外的刺激及びそれへの反応という物理学的、生理学的過程を示す概念としての「感覚」と、それを統合する心的表象概念としての「知覚」という連合主義的な心理学に基づく概念装置とは次元を異にする。そもそもフッサールにとって、「『意識』は徹頭徹尾、意識から成り立っており、既に感覚が…『意識』」(XXIII 265)に他ならないことから、現象学的な「知覚」と「感覚」の区別は、前者が超越的对象への関係という「志向性」を含むものであるのに対し、後者は志向性の「担い手」(III/1 75)、もしくは「拠り所」(XIX/1 407)ではあるが、それ自身は志向性を欠いた「非志向的(nicht-intentional)なもの」(ebd.)であるというように、意識内部での概念の配置ということになる。

さて感覚は、『イデー I』では周知のように、志向性の構造契機として統握図式に組み込まれる形で展開されている。それは志向的モルフェーによって生化される、それ自身では「形式を欠いた素材」(III/1 193)である。これにより感覚の多様が統一的知覚対象へと統合されるプロセスが描出される。この図式を用いた具体的な事象分析において感覚は主に、外的な空間対象の「射映多様性」(III/1 85)として主題化されている。ここでは種々の感覚の中で視覚与件に特権的な地位が与えられる。その際肝要なことは、この統握図式を用いた分析一切が、ノエシス—ノエマという志向的意識の相関関係を、つまりここでは「知覚」を主題化するパラダイムに支えられているということであり、我々が多様な感覚与件のもとで同一の客観を思念し、また同一の感覚与件から様々な客観を思念するという、客観性のパラダイムに裏打ちされているということである(vgl. XIX/1 § 14, III/1 230, VII 67f.)³。それ故このパラダイムのもとで、射映という呈示的機能を担う感覚与件それ自体に分析の目が向けられると、途端にその規定の曖昧さが暴露される。統覚的媒介を通じて射映現象は、絶えず或る現出者の射映という規定を受け、その際、具体的な事例において度々、例えば家屋は、そのつど「一面的な(einseitig)」所与性という仕方で記述される(vgl. XVI 50ff., 56f., III/1 91, ff.)。空間的現出者は、決して一挙に与えられるのではなく、諸々の側面的な現れの変化を貫いて同一的对象として統握されるのである。ここでは「側面的所与」と「射映」は同義である(vgl. XVI 146)。しかしでは、この「側面(Seite)」という概念は射映体験の内実を正確に言い当てているのであろうか。後年フッサールは、「或る側面は諸々の他の側面との共存在によってのみ意味を持つ」(XV 124)と述べている。つまり一つの側面が側面として成立するのは、そもそも他の側面との指示連関が成立している限りでのことであり(vgl. XI 4f.)、そのことから既に、「知覚される事物一般と同様に、部分や側面、契機といった事物に帰属するもの一切もまた、至る所で同じ理由に基づいて知覚から必然的に超越している」(III/1 84f.)ことになる。射映という「連続的なヒュレー的変転」(III/1 227)を側面的な所与性として記述することは、説明図式としては明瞭であるとしても、その本質を捉え

³ ホーレンシュタインは、同一の感覚与件から様々な統握様式が帰結するというフッサールの言明に、感覚の恒常性仮定(Konstanzannahme)を読みとり、統握図式の限界を指摘している(vgl. E. Holenstein: *Phänomenologie der Assoziation, den Haag, 1972, S. 101, 104*)。ただしフッサール自身その探究の途上、特に想像及び時間意識に関する文脈において統握図式に関する自己批判を繰り返し行っている(vgl. XXIII 265ff., XXXIII 176ff.)。

てはいない。というのも、射映は意識の实的成素として端的に体験されているにも拘わらず、それが事物の側面として捉えられている限り、既に超越的統握によって構成されており、その側面そのものが更に射映を通じて与えられなければならないということが帰結するからである。しかし感情体験が射映によって自らを与えることがないと同様(vgl.III/1 92)、射映それ自体は射映を通じて与えられるものではない。まぎれもなく与えられている射映体験を、ノエマを手引きとして導出する諸概念によって構成する試みは、様々な困難を引き起こす。それは絶対的な明証性を有するものであるはずの感覚が(vgl.III/1 228)、先に述べたように形式を欠いた空虚な素材に過ぎないという、存在的身分の曖昧な規定を受けることにも端的に現れている。また統握理論による知覚の主題化は、視覚与件への抽象的限定に加え⁴、個々の志向的体験を断片的に切り取る形で行われるが、現実には個々の対象が虚空に浮かぶように知覚されることは決してない。外的知覚における対象の主題化は、周囲の対象が地平化することと共に起こっている。では、地平意識をも含めた一連の対象知覚の流れにおいて射映体験はどのように記述されるのか。この問いに統握図式の枠組みのみで答えることは容易ではない。我々の視野に現れる多様な対象は、静止しているように見えても一切が止むことのない細かな射映の直中にある。しかし我々がこの射映の変転そのものを、現出する対象の志向的關係へと組み込むことなく体験し、記述するには芸術家的な感性の修練が必要とされるはずである。我々は志向性を通じて常に既に感覚体験を超出している。それ故、感覚体験を知覚の記述様式から捉える試みにはもともと無理があるのではないか。知覚と感覚がそれぞれ原理的に異なる主題化の方法を要することがまずは明確にされなければならない。

1-2 感覚の非主題性と原意識

前節で我々は、知覚を主題化する統握図式のもとでは、感覚の規定が曖昧なものにとどまることを指摘した。知覚作用が諸々の志向的对象へと向かっている際、感覚は知覚されることのない体験として非主題的に与えられている。ではこの感覚の非主題性とは如何なるものであるのか。

『イデーニ I』に先立つ 1906/07 年の講義「論理学と認識理論入門」における「低次の客観化形式」という表題をもつ草稿の中で、フッサールは感覚の主題化について論じている。「どのような仕方で、知覚において感覚は意識されているのか。…我々は感覚を見ているのではないし、感覚へと我々の知覚的注意や、我々の統覚的な客観化することの信憑が向けられているのでもない。では、知覚されていないとすれば、ここで『意識されている』とは何を意味するのか」(XXIV 243)。感覚は、志向性が超越的对象へと超出するその手前で生起している意識のされ方である。しかしこの手前という表現には注意が必要である。感覚の非主題性は、意識の注意作用が向かう以前の背景的地平の非主題性とは異なる。そもそも「感覚は対象的な背

⁴ 視覚を主要な説明図式とする統握的構成は、触覚や聴覚の与件、痛みなどの感情体験にも転用され用いられている。

景には属していない。というのも、この背景とは事物的な背景だからである」(ebd.)。背景意識は、「如何に曖昧であろうとも、それは対象的背景であり、従って統覚的に構成されている」(XXIV 250, vgl. III/1 189)。つまり注意が向いていないとはいえ、それは任意に主題化可能な「ノエマ的地平」なのである(vgl. XXXI 5)。それ故、「対象的背景の意識と〔感覚〕体験されてある(*Erlebtsein*)という意味での意識を混同してはならない。そのようなものとしての体験は、その存在を有してはいるが、それは統覚の対象ではない」(XXIV 252)。では、この統覚の対象ではないという感覚の意識のされ方とは如何なるものなのか。

同講義においてこの感覚の問いは次に、反省以前の「素朴な(*naiv*)」意識体験と反省により主題化された体験という後の態度論の萌芽を含む問いへと移行する。このことは、感覚体験が反省による主題化以前の素朴な経験と同一視されることに由来する。「諸々の感覚は決して背景的な事物ではない。にも拘わらず明証的であるのは、端的な家屋への対向から、別様な対向が、つまり知覚とその内容への『反省』が可能であるということである。……しかしでは如何にして知覚の内容が、例えば感覚という知覚内実が、反省に先立って与えられているのか……」(XXIV 244)。フッサールは、「素朴な知覚」と「反省という解明する作用」との比較を試みることで、「……根源的な意識に対して変化した意識を見出す」(ebd.)。ここでは反省以前の素朴な意識が、「根源的で」、「先現象的な(*präphänomenal*)体験」として、統握の手前の感覚の非主題性と重ね合わされている。しかし感覚の非主題性は、還元理論によって明確化する自然的態度における意識の匿名的没入性と同じことを意味しているのか。もしそうであればことは単純である。つまり現象学的反省により一切を相関的意識現象として主題化し、記述すれば済むことになる。しかし前節で扱われた感覚は、まさに現象学的反省により主題化された知覚という志向的体験に含まれる感覚の記述だったのであり、その記述では扱いきれないものとして感覚の位相が指摘されていたはずである。実はここには、フッサールの感覚に対する二重の立場の取り方が混在しつつ如実に示されている。

感覚は一方で、反省以前の素朴な「単なる体験(*bloß Erlebnis*)」(XXIV 244)としての「先現象的な存在」であり、反省により主題化され、対象化されるものとして看做される(vgl. XXIV 244f., III/1 229, XIV 48)⁵。とはいえ、事後的な反省による「意識変様」(III/1 166)を被った後にも容易に類型的構造が剔抉されうるのは、志向的意識の相関項に他ならず(vgl. III/1 146)、そのため非志向的な感覚それ自身の規定は、知覚の記述様式を感覚に引き下ろすことで対象的に記述されるか、もしくは曖昧な存在的身分を付与されるかに留まる。それが前節の帰結であった。

しかし他方で感覚は、時間意識の分析が先鋭化することで、「超越論的意識」の反省構造そのものの根拠をなす固有な自己意識の次元としても開示される。反省の根

⁵ 自然的態度における素朴な意識生を感覚体験と同じものと看做することはできない。というのも確かに、自我は自然的態度においては志向性を主題的に意識していることはないが、だからといって現象学的な意味での知覚体験を行ってはいなかった、つまりそこでは感覚体験にとどまっていたとは決して言えないからである。もしそうであったとすれば、自然的態度において我々は事物の個的同一性すら理解しえなかったはずである。

拠であるが故に、反省的には捉えきれない「原意識(Urbewußtsein)」が分析されるのもこの次元においてである。その意味で原意識は反省以前の自然的な意識とは単純に同一視されえない。にも拘わらず、同講義においてフッサールは混乱しつつ以下のように述べる。「我々は今や本質分析を遂行し、体験の概念を以下のように構成する。つまり体験の概念とは、現象学的な時間性内部で延長する一切の与件…に該当するものである。そして我々は、単なる体験という概念を原意識という概念として構成する。原意識において与件は、未だ対象的になっていないにも拘わらず存在している。原意識において与件は、その先現象的な存在を有しており、しかも明証を伴ってそれを有していなければならない」(XXIV 245)。この原意識の記述は、『時間講義』の附論 IX における意識流分析の中で詳述されるものの萌芽段階であることは否定しえない⁶。実際、先の引用の後でフッサールは、「一切の先現象的なものと、反省と分析によって現象化されたものとは…時間的な流れの統一に組み込まれる」ことを示唆しており、前者の存在は、「十全的な知覚統握によっては客観化されない絶対的な存在」であると述べているのである(XXIV 245f.)。

時間意識の探究は、主に聴覚的な時間客観を手引きにして意識それ自身の時間的構造を別括することにある。その際、まさに感覚が「根源的な時間意識」、つまり原印象が過去把持へと沈み込む不断の流れとして記述される(vgl.X 107,XXIII 251,289)。反省的意識とは異なる次元の意識である「原意識」が、時間が生起する感覚においても見出される(vgl.X 118ff.)。ここで問題になっているのは、対象化されることはないにも拘わらず気づかれている、全ての現象を「構成する(konstituierend)」意識の根源的な作動そのものである(vgl.X 73ff.)。通常反省の主題になるものは、一切が構成された、つまり時間に内属する対象性であることから、時間そのものの生起という構成する諸位相を主題化する試みは容易に無限後退を引き起こす(vgl.X 114f.,118ff.)。ここでは、構成論が極限化することで統握図式における作用—内容という区別がもはや維持できないことが端的に浮き彫りになっている。我々はこれまで、「感覚すること(Empfinden)/感覚作用」と「感覚されたもの(Empfundene)/感覚内容」との区別を意図的に行ってはこなかった。それというのもフッサール自身が、『論研II』ではこの区別を拒否し(vgl.XIX/1 408)、更に『時間講義』では無限後退の怖れから繰り返しこの区別について逡巡しているからである⁷。周知のように『時間講義』の脚注において、フッサールは「感覚されたものが……既に構成されているのかどうか」という問いを未決定のまま回避した後、「一切の構

⁶ 原意識概念に纏わる概念的変遷はニーによる以下の論文に詳しい。NI LIANKANG: “Urbewußtsein und Reflexion bei Husserl”, in :*Husserl Studies 15* ,Kluwer Academic Publishers, 1998, p.77-99.

⁷ しかしそれと同時に、感覚与件が内在的に「構成された対象性」と看做され、それを構成する根源的な「感覚すること」からは区別されている発言もまた見出される(vgl. X 107, 334)。フッサールは、時間意識の形式と時間内部で延長する感覚内容という区別のもとで形式に優位を与える。しかしこうした理解は、モルフェー(形式)とヒュレー(内容)という諸概念の配置からも明らかのように、結局は知覚モデルを時間意識へと下ろして論じているに過ぎず、様々な困難を招来することになる。我々が本稿で取る立場は、こうした知覚の認識論モデルをできる限り遮断し、感覚の分析を行うことにある。

成が統握内容—統握という図式を有しているわけではない」と記し(X 7 Rb.)、同じく非志向的な感覚の存在に関する脚注の中で、「原意識を、つまり…構成する流れそれ自身を……作用として特徴づけること」がたとえ可能であるとしても、「そのことは種々の困難を引き起こす」と注意を促している(X 89 Rb.)。そもそも流れゆくヒュレーの「内在的統一は、その構成において…知覚されたものが超越的知覚において意識される仕方と同じように意識されるのではない」(X 91,293)。つまりここでの構成は、内在的時間における位置措定により成立するノエマの超越的構成ではなく、一切を構成する絶対的意識それ自体が成立する場面に内的に巻き込まれたヒュレーの時間的構成であり、同時に、時間のヒュレー的構成なのである。ヒュレーは、時間の生起そのもの一つになった「構成する生成(Werden)のうちにある」(XI 164)。この場面での、決して反省的な表象系列には還元しえない固有な自己意識のあり方を、『時間講義』でフッサールは把持の「縦の志向性」(vgl.X 83)として記述しようと腐心した。確かに原意識概念には、反省の無限後退を避けるために取られた要請的処置との感がなくはない。しかしここで見抜かれていることとは、変転するヒュレーの原意識が同時に、過ぎ去るという「持続」の生起、つまり時間生起のプロセスそのものであるという感覚的意識の存在論的構造なのである。従って我々の課題とは、この原意識概念に定位して、発生的現象学とともに展開された感覚の受動的綜合及びその触発現象をどの程度まで新たな光で照らすことができるかにかかっているのである。

2 感覚と身体

2-1 身体性の布置

我々が前節で証示したことは、現象学における感覚固有の位相である。感覚は時間の生起に深く関わる非主題的な自己意識である。ただし、この「自己(Selbst)」は未だ「自我(Ich)」を意味していない。フッサールにおける自我の同一性意識は、厳密には再想起を含めた諸々の志向的作用と共に成立する(vgl.XV 643)。それに対し感覚における自己は、自我へと触発が至る以前から既に自らの境界を形成している。時間意識はこの感覚における自己と共に生起するのであるから、我々は「感覚的認知(原意識)」を自我が関与する「知覚的認知」から厳密に区別する必要がある⁸。

そもそも感覚的認知は、意味や言語を媒介とする知覚的認知とは異なり、知覚的認知が正常に遂行される際には絶えず隠されている身体の作動と密接に連動する気づきである。我々は、この感覚的認知のお陰で作用的な意識能作を介在させることなく、林檎を知覚しているのか、想起しているのかの意識様態の区別に気づき、未だ対象として統握されていない破裂音や、目の前を急によぎるものに対して咄嗟の

⁸ 我々は感覚的認知という概念を、フッサールが作用意識としての反省とは異なる意味で用いる「内的意識(inneres Bewußtsein)」及び「内的知覚(innere Wahrnehmung)」という概念として理解している(vgl. XXIII 308, X 126)。この感覚的認知についてフッサールは、確かに迷いも見受けられるが、様々な箇所而言及している(vgl. III/1 192, IV 118, 253, X 95,110, XI 90, XIII 246, XVII 292, XXIV 251)。

身体的動作で応えることができる。従って感覚的認知は、ある対象性を他の対象から際立たせ、孤立化し、確定する知覚的認知とはそもそも異なる作動を行い、通常は自我の目的的行為以前の身体運動を制御する気づきとして段階的に形成されている。段階的というのは、感覚の裾野は広大であり、それは自我の知覚的認知と重なり合う「受容性」の段階から、一切の自我関与を欠いた「先触発的(vor-affektiv)」段階にまで及ぶからである。例えば痛みを経験は、先触発的な段階で既に身体運動や表情の微妙な歪みをもたらし、自我が触発された段階では、超越的誤謬の入り込む余地のない感覚的確信を形成するに至る⁹。それ故生成する感覚は、自我による対象構成とは全く異なる構成プロセスを経ていると考えられる。ここに、ヒューレーが「自我に異他的(ichfremd)」である所以がある。自我は、対象表面の赤色から緑色の裏面を予期的に意味形成し、構成することはできても、赤の感覚契機を緑として構成することはできず、暴力的な幻聴の感覚的確信を錯覚として統握し、解除することもできない。感覚は、「自我を欠いた(ichlos)」意識の流れとして絶えず生起しており、むしろこの流れにおいてのみ自我は自らの能作を斉一的に遂行することができるのである。

にも拘わらず、この感覚の固有な生成を自我的構成の枠内に組み込もうとする趨勢には、自我によるキネステーゼの直接的な制御可能性及びその能作による知覚対象の構成という客観性のパラダイムが前提されているように思われる。つまりここでは、自我の原初的な自由を保証すると看做されるキネステーゼが、「意識一般に感覚与件が与えられうるための可能性の条件」¹⁰として設定され、それにより感覚的与件は、薄められたノエマのような相関的对象として構成されることになる。しかしそもそも与件もキネステーゼも感覚体験であり、そこにおいて時間意識が生起するのであるから、構成・被構成という二元的図式はうまく機能しない。しかもこうした立論においては、客観性の構成に首尾よく接木される感覚が暗に選択されており、それ以外の感覚の固有性は度外視される¹¹。更には自我によるキネステーゼの直接的な制御可能性それ自体の生成過程も問われることはない。従って、客観的な対象知覚の参与とは異なるパラダイムにおいて身体及び感覚が如何なる事象的布置を形成しているのかを問うことには、未だそれなりの積極的な意義があるように思われる。

2-2 身体運動とヒューレー

⁹ とはいえ触発以前の痛みを痛みとして記述するのは正確ではない。痛くない痛みというものよく解らないものである。それ故我々は、そうした触発以前の身体性の異常な作動に伴う緊張性や収縮性といった気づきのあり方を触発的な痛み感覚と比較し更に詳しく探求する必要がある。

¹⁰ Ulrich Claesges: *Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution*, Den Haag, 1964, S.74.

¹¹ N・ドゥプラズは、フッサール現象学における感覚の問題が、客観化の傾向が強い局在化的感覚(視覚、触覚、聴覚)に優位が置かれているということを指摘し、そうしたパラダイムから改めて感覚概念を解放することで、嗅覚や味覚に関する新たな感覚論を展開するに至っている。N・ドゥプラズ、「肉の感覚の超越論性—伝播性の仮説」、『思想』、No.916、岩波書店、2000年、p.132-158参照。

通常、「キネステーゼが知覚するものとして作動するのは、対象との『接触(Kontakt)』においてだけ」であり、その際、同時に作動する「他のキネステーゼは経過するが、そもそも知覚キネステーゼとして共作動することはない」(vgl. XIV 551)。自我の知覚行為が成立する場面では、知覚的に作動してはいないキネステーゼが絶えず身体システムの制御を行っている。それは重心のバランスの統御であり、最適化への細かな眼球運動であったりする。そしてこの領域は、「先触発的」に「ヒュレー的融合」が起こる領域でもある(vgl. XI 154, 159ff.)。既にナミン・リーは、身体がこの領域に如何なる仕方で投錨しているのかを、部屋の寒さを感じ取る触発以前の「原受動的な(urpassiv)」身体運動に見出した¹²。温度が下がることで増大する寒さの感覚は、触発以前に、身体四肢の運動、例えば手足の震えや擦るといった運動と共に起こっている。感覚が自我触発へと至った段階では、身体運動は既に自我性へと取り込まれているが、それ以前の運動の主体は容易に特定できない。この次元での身体運動の「活動性(Aktivität)」にフッサールは、自我的「能動性(Aktivität)」とは区別される根源的な本能や衝動及び習慣化した衝動とを見ていたと思われる(vgl. XI 178, XIV 333f.)。この段階には未だ、寒いから手を擦るといった自我の動機連関を設定することはできない。自我の「キネステーゼ的動機づけ」は、「ノエマ的構成」に固有なものであり(vgl. XI 13)、そうした知覚的認知に関わる「Wenn-so」連関は、感覚的認知とキネステーゼの運動性には入り込む余地がない¹³。寒いから手を擦るのではなく、匿名的な身体運動が同時に、寒さや筋肉の収縮感という多様な感覚的認知の端緒を形成しているのである。

キネステーゼの運動性と共にある感覚として固有なものが「触感覚」である。ただし、触感覚が典型的な「局在化する(lokalisierend)」感覚であるのに対し、キネステーゼは自ら自身で局在化することはない(vgl. IV 151)。運動の自己感覚としてのキネステーゼは、触覚的質料性を一切含有してはいないのである。とはいえ局在化しない身体運動を考えることはそもそもできない。両者を区分することの「難問(Doktorfrage)」(XVI 161)がここに潜んでいる。キネステーゼの局在化は、その一切を触感覚に負っている限り、非常に可塑的で曖昧なものである。「我々が手の何本かの指で同時に触る場合、しかも特殊なキネステーゼが互い互いに動くのではなく、むしろ統一的なキネステーゼにおいて同時に触るような場合、まるで我々はひとつの指を持っているかのようにであり、キネステーゼにおけるひとつの指であちらこちらに触れているかのようなのである」(XV 296)。従って、キネステーゼが作動し、同時にその運動性が気づかれるためには、触覚的なヒュレーがそのつど局在的に生成し、変転しなければならない。ここでは、触感覚の局在性がキネステーゼの運動性によって媒介されると同時に、キネステーゼの運動感それ自体が触感覚の変転に媒介さ

¹² Nam-In-Lee : *Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte*, Kluwer Academic Publishers, 1993, 115ff..

¹³ 従ってヴァーチャルリアリティという手法は、知覚的認知における「Wenn-so」連関を擬似的に産出することで、キネステーゼを含む感覚的認知を誘発し、そのことにより逆に擬似的な世界に現実性を付与することにある。ただし知覚的認知が、自我を欠いた身体運動に関わる感覚的認知と如何なる関係を持つかが更に問わねばならない。

れるという、「原連合(Urassoziation)」における相互覚起が成立している必要がある¹⁴。感覚的認知と運動性は、決して無差別化されることがないにも拘わらず、必然的に融合し連動することで、触発野に投錨する身体性を形成するのである。

また触感覚は、キネステーゼが統御され、対象の静止状態が確保されることで精度が増す視感覚とは対照的に、運動の最中でこそ認知的精度を発揮するものである¹⁵。更に、「単に見ることは、実在性(Realität)と同様に運動の最終的な証示を与えることは決してない」(XIV 551)のに対し、触感覚は運動の最中で運動それ自身の気づきと連動する。自我の意志的制御の効かない身体運動において、触感覚に認知的優位があるのは明らかである。度々フッサールが発生的現象学の類例として取り上げる幼児の授乳経験では、まさに「不随意的なキネステーゼ(unwillkürliche Kinästhesie)」(XV 606)の作動が問題となっており、そこでは味覚や嗅覚、聴覚といった諸感覚が、唇や舌、呼吸器等の触覚的器官と覚起し合う身体運動に巻き込まれる形で全て生じている。自我及びその志向性はこの身体運動の内で育まれるのである。自らの声を感じ取る聴感覚は、発声により振動するキネステーゼが口腔器官や内臓感覚を触覚的に局在化させることと共に始まる(vgl. IV 95, XV 606)。「音」と「振動」の感覚がもつ親和性は既に発生的な身体運動に根を下ろしているのである。ただし成人的段階においては、超越的傾向の強い視感覚が知覚的認知の審級となることから、本来キネステーゼを媒介してのみ認知される感覚固有の質性が、身体運動からは切り離され、孤立した知覚の対象性質として統握され構成されることになる。しかし匂いや味の経験を思い起こしてみれば明らかなように、想起においてでさえ擬似的な身体運動を切り離しえないことに我々は気づかされるのである。

先のリーの例による寒さの感覚は、未だ部屋や外気の温度として超越的に統握されてはいない。とはいえそれは、単なる主観的状态として感じられているわけでもない。主観の内的状態として把握することも既にひとつの統握の結果である。ここでは単に、キネステーゼと連動する感覚的認知が、触発的な度合いをもつ「実的な(reell)」野として自我を取り巻いているに過ぎない。とはいえこの段階の触覚の局在化には既に、自我に「二重統握」(IV 147)を動機づける固有の感覚質への気づきが伴われている。この感覚のあり方こそが「感覚態(Empfindnis)」に他ならない(vgl. IV 149)。例えば、ただ手を空中で動かすさいの触感覚には、局在感覚が、ある種の抵抗感覚、つまり気体や液体といった個的な対象には関係づけられえない質料性の原初的認知と重なり合いながら生じる。そこには生ぬるさや湿っぽさ、乾性、粘性、弾性といった身体の運動性に媒介されて初めて気づかれる質感が含まれる。

フッサールは、『イデーⅡ』の「物質的自然の構成」における補足の中で、こうした独特な対象性の認知を「媒体(Medium)」として考察している。ここでの分析には、「根源的に与えられ証示される事物、すなわち固体(fester Körper)から出発する

¹⁴ 「立ち現れる際立った感覚は、原連合的に秩序づけられた(純粋な自我を欠いた受動性における)キネステーゼを覚起する」(EIII 9 23b)。引用は、山口一郎『現象学ことはじめ』(日本評論社、2002年)185頁。

¹⁵ D・カツ、『触覚の世界(Der Aufbau der Tastwelt)』(新曜社、2003年)。特に49頁以下参照。

ことで構成段階を探究する」(IV 53)という領域的存在論の客観化的枠組みが遵守されているにも拘わらず、身体運動と共にある感覚的認知に関する豊潤な唆も含まれている。「根源的な『世界』に属する事物の一切は、空気という媒体の中で存在しているが、その媒体としての空気は大抵気づかれておらず、故意に激しく手を動かすとか、あるいは他の物体の急な運動が私に微風を感知させる(spürbar)とかによって初めて媒体として把握される。媒体は『濃密で』あったり『希薄で』あったりして、運動をより容易にもしくはより困難にする。抵抗があまりに少なく媒体に気づかないこともありうる」(ebd.)。こうした媒体経験は、統覚を通じて構成される固体的対象とは異なり、志向性による超越化の手前で、身体運動が実現する原初的な空間性の意識を芽生えさせている。「固体は、……視覚と触覚によって、差し当たり相対的に完結した二つの層において、しかも性質で充実された形態を『完全に』与える層において構成される。しかし媒体の場合は事情が異なる。媒体もまた、我々にとって物質的という意味での液体または気体として構成されはする。しかし媒体は、自らの内に物質的事物を……包含する……空間充実もしくは充実された空間性として自らを与える」(ebd.)。この媒体の感知は、キネステーゼが自らの動きのしなやかさ、ぎこちなさを感じ取る最中で既に実行されている身体行為に内的な空間把握である。それ故媒体は、空間性そのものを質料性の側から産み出すことを可能にするような固有な身体感覚なのである。

通常、空気や水といった物質は、意識の相関的身分として超越的地位を与えられる統握対象である。フッサール自身『イデーⅡ』では客観化的なパラダイムの中を動いていることから、媒体は「根源的には知覚されず、間接的な経験と思考のプロセスにおいてのみ獲得される」(IV, 53)と述べる。つまり根源的に知覚される延長的对象を基盤に、理論的思考を通じて間接的に媒体は構成されるというのである。しかし我々が、媒体経験は「根源的には知覚されない」というフッサールの言明を強調し、なぜならそれは身体性が根づく感覚経験に他ならないからであると理解するのであれば、これにより媒体は、客観的对象に付帯する二次的对象という身分から脱するだけでなく、客観化的な構成能作が常に既に受容している根源的な身体性の形成に参加していることが証示される。超越論的意識の成立現場は、身体運動と共にある感覚の生成、そこにおける客観化することのない感覚質に溢れているのである。

結

我々はフッサール現象学における感覚概念がもつ問題性を明示するよう試みてきた。ヒュレーは時間意識の成立に内的に関与しているものであり、その限りでそれを当の意識が向かう対象として現出させることは困難である。従って感覚は、意識それ自身への根源的な近さゆえに「直接的」と形容されることになるが、この直接性の内実そのものへと問いを向けることが初めて、自我の反省知がある種の限界に突き当たることを示すとともに、感覚を活動的な身体における知として捉え直すことを可能にするのである。ヒュレーが、意識の直接的明証体験であると同時に、「自我に異他的な」ものであるのは、一切の自我的行為にとって自明な感覚が、自我的

構成とは異なる生成において自明性そのものを身体的に形成しているからであり、その生成には自我が決して制御しえない力動性が絶えず含まれているからなのである。

とはいえ客観化のパラダイムは、この感覚の固有な生成のあり方を隠蔽してしまう。それ故フッサール現象学においては感覚に対する二重の立場が混在する。つまり一方では、時間意識の成立場面における感覚の根源性が見出され、他方で媒体経験が示すように、対象の客観的構成にとっての付帯的存在としてそれは扱われるのである。こうした二重の立場が見られる経験領野は実は「感情(Gefühl)」にも同様に当てはまる¹⁶。客観化のパラダイムにおいては感情も媒体も、同一性を維持する確固とした対象定立の基盤の上に構成されるものと看做されている。しかしN・ドゥプラズが指摘するように、匂いや味の非局在的な感覚には、対象の客観化的特定の有無に関わりなく、直接的に快、不快の感情性が発露する¹⁷。蒸した粘りつくような媒体の感知は、客観化作用による対象呈示を待つことなく、身体の敏捷な動きを奪い、逆にそこから波及的に一切の現出するものに感情的なトーンを帯びさせる。それ故、「バラ色の光に包み込まれた」出来事や、「悲しみの色を纏った」出来事といった感情経験の記述は(vgl.XIX/1 408f.)、身体が投錨する感覚、つまり根源的な時間意識が成立する次元と同次元に定位して扱われない限り本来的には明らかにしえないのではないか¹⁸。我々は、客観化のパラダイムにおいては失われてしまう感覚や感情といった経験領野の適切な事象的布置を回復すると共に、そのパラダイムにおいて構成された意識の階層構造を解体することで、改めて意識生の具体的実像を捉え返す必要があるように思われる。

注

- ・フッサール全集(*Husserliana*, Den Haag : Martinus Nijhoff, Kluwer Academic Publishers 1950-)からの引用は巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字によって本文中の()内に示す。
- ・原著における強調は「強調」、筆者による強調は「強調」と示す。
- ・フッサールの主要な著作を日本語で示す場合は、以下の略記を用いる。
 - ・『論研』－『論理学研究』
 - ・『イデー』－『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』
 - ・『時間講義』－『内的時間意識の現象学』

¹⁶ 客観化的なパラダイムにおける感情体験についての分析は、拙論「フッサール衝動の現象学—意識の志向的分析における感情の問題—」『東洋大学大学院紀要』(第39集、2003年)を参照していただければ幸いである。

¹⁷ N・ドゥプラズ、前掲論文、151頁以下参照。

¹⁸ 既にナミン・リーは、以下の論文で感情体験をフッサールの草稿に基づき、気分の現象学として展開している。Nam-In-Lee: “Edmund Husserl’s Phenomenology of Mood”, in: *Alterity and Facticity*, Kluwer Academic Publishers, 1998.